

十人の皇妃を持つ夫との歌の贈答

斎宮女御徽子の村上天皇への心情

西丸 妙子

はじめに

一夫多妻の平安時代、夫を共有する境遇にあった女たちはどのような思いを抱いて、どのように生きていたのか。その心情を自ら表現している資料は少ないのだが、『斎宮女御集』には、十人の皇妃の一人であった女御徽子が、夫である村上天皇と贈答した歌や、天皇への思いを詠んだ歌が六十数首収められている。それらの歌から見えてくるものは、徽子の個としての心情であるが、しかしながらそれは当代の女たちに共通する胸中であるかもしれない。女歌であるという表現形式と、対応の類型化を差し引いても、なお立ち上がりてくる徽子の声を聴きたい。

一、出自と境遇

まず女御徽子女王の人となりを知る手掛かりをみておく。

徽子は九二九年、醍醐天皇の四男の重明親王を父とし、関白太政大臣藤原忠平の二女寛子を母として生を受けた（資料一）。八才で斎宮に卜定され、十七才で母の死去によって斎宮を退き帰京するまでの九年間、その人格形成の少女期を徽子は斎宮として、厳かに、清らかに、重責を負わされて過ごしたはずである。この尊貴と権勢の接点の出自と、神聖な要職にあったという特異な経歴とは、その後の後宮の皇妃としての在り方に深い影響を与えていいるようである。

斎宮としての生活では、相応しい修養として、また無聊を慰めるためにも詠歌と弾琴に精を出していたと思われ、入内してからもこれらの修養は、徽子を支える背骨ともなっているようである。

さらに父重明親王の存在も徽子の内外に多大の関わりを持つ要素と考えられる。重明親王は、徽子の夫村上天皇より二十才年上の異母兄。徽子が入内した時には、村上天皇の生存している兄では最年長であり、入内から一年ほど経った頃には、皇族最高の地位の式部卿を授けられている。優れた記録『吏（李）部王記』を書き続け、弾琴などの才芸や風流にも秀でた皇子として宮廷社会で尊崇されていた。その証とも言えることが、時の最高権力者忠平の娘婿とされたことであり、その寛子が伝領した東三条邸に一家は住んでいた。徽子が入内して六年足らずで重明親王は死亡するが、その間は殊に、徽子は十人の皇妃（資料二）の中で最高の家格と、宮廷での父の権威によって、村上天皇からも、他の皇妃たちからも重きをおかけたのではなかろうか。

しかし父重明親王没後の十三年ほどの女御としての日々は、徽子にとって暗く重いものであったことがうかがえる。村上天皇からもっとも寵愛され続け、後宮を圧していたのが東宮の母で、六人の子を成した中宮安子であった。その蔭で他の皇妃たちは不

西暦年	年号	徽子事項
九二九	延喜7	
九三〇	承平6	徽子誕生（父は醍醐天皇の四男重明親王、母は関白太政大臣藤原忠平二女寛子）
九三六	天慶3	九月 斎宮卜定（八才）、九三八年九月伊勢群行（十才）
九四〇		
九四六		
九四五		
九四八		
九五六		
九六七		
九七六		
九八五		
九八六		
九九七		
九九八		
九九九		
貞元1	寛和2	夏頃 四月 九月 皇子を出産するも即日死去（三十四才）
貞元2	貞元1	九月 村上天皇へ入内（三十才）
貞元3	康保2	十二月三十日 村上天皇へ入内（三十才）
貞元4	応和2	冬頃 規子内親王（村上天皇の第四皇女）を出産（三十一才）
貞元5	天慶9	九月 斎宮退下（母の死による）、帰京（十七才）
貞元6	天慶8	
貞元7	天慶7	

「資料二」徽子の略歴

徽子事項	二月 成明親王（十五才）元服、四月藤原安子入内（十四才）
	四月 村上天皇即位（二十一才）
	五月 父式部卿重明親王死去（四十九才）
	九月 村上天皇死去（四十二才）
	四月 中宮安子死去（まもなく尊子村上天皇の寵愛を蒙るか）

参考事項

参考事項	二月 成明親王（十五才）元服、四月藤原安子入内（十四才）
	四月 村上天皇即位（二十一才）
	五月 父式部卿重明親王死去（四十九才）
	九月 村上天皇死去（四十二才）
	四月 中宮安子死去（まもなく尊子村上天皇の寵愛を蒙るか）

ナ シ	更 衣	女 御	中 宮	皇 妃 の 身 分
藤原登子 (○)	藤原祐姫 (2人)、藤原正妃 (3人)、源計子 (2人)、藤原有序 (○)、藤原脩子 (○)	徽子女王 (2人)、莊子女王 (2人)、藤原芳子 (2人)、藤原述子 (○)	藤原安子 (9人)	皇妃の氏名 (一)の中は村上天皇との子供の数

【資料二】村上天皇の後宮の様相

遇をかこったであろうが、その中宮安子も三十八才で死去。まもなく安子の妹で、父重明親王の後妻であった登子が天皇の熱愛を受けて入内するという、徽子にとっての屈辱的な事態が生じた。実は村上天皇の登子との密会はそれ以前、重明親王の死後からすでにあったようで、徽子は当然その事実を知っていたであろう。登子は徽子とはほぼ同年令であるが、徽子にとっては義母という立場の人と夫を共にする苦悩には、世間の好奇の目に耐えることも加わっていたであろう。また父への思いが深かった徽子にとって、義母登子が夫の死を悼む間もなく、早々に他の男の愛を受け入れ、その男がことともあろうに我が夫であるという、二重の痛みを抱えこむことになったのである。このように徽子は皇妃であること、その中でも出自は皇族、母方の祖父は最高権力者、父は宮廷の重鎮、加えて本人の神聖な斎宮としての経験と優れた教養などと、限りなく恵まれた女であったのである。さればこそ徽子の苦悩も深かつたに違いないが、それは彼女の歌で探ってゆかねばならない。

二、徽子からの天皇への贈歌の経緯

徽子の『斎宮女御集』は四系統の伝本があり、最も歌数が多い西本願寺三十六人集本でいえば、約四分の一の六十四首が、書陵部本でいえば三分の一ほどが村上天皇と贈答した徽子の歌、あるいは天皇とのことを詠んだ独詠歌である（資料三）。贈答歌にはほとんど天皇の歌や伝言なども記されているので、その両方をあわせてみると、資料の多さにおいても、また当事者が皇妃の一人と天皇という至上の二人の、しかもその天皇は十人の女たちで共有する夫であるという、一夫多妻の実態を如実に見せる

男女の立場での贈答歌であり、このような性格の資料は他に類をみない。

『栄花物語』には徽子について、「宮さへおはしまさねば、参り給ふこといたし。さるはいとあてになまめかしうおはする女御をなど、常に思ひ出でさせ給ふ折々は、御文ぞ絶えざりける」（巻第一）とある。徽子以外の皇妃と村上天皇との贈答歌は今日わずかしか知ることができないが、それでも天皇と徽子との贈答歌は抜きん出て多かったのではないかと思われる。それは『栄花物語』に書かれているような理由だけではないのかもしれない。徽子の機知的で技巧的な歌のうまさ、さらには毅然として、毒を含んだ、それでいて濃艶な愛情を奥底に潜ませている歌は、天皇にとっては刺激的であつただろう。村上天皇は徽子を文芸の世界での妻として重んじたのだろうか。

そこでまず、徽子と天皇の贈答はどういう形でやり取りされたのかをみてみる。【資料三】の「贈答関係」欄を見ると、歌番号→としたものがはるかに多い。これは天皇が先に徽子に歌を贈ったのに対して徽子が返歌したのである。逆に矢印→番号というのは、徽子の方が先に天皇へ歌を贈ったということであるが、これはD歌群と他に少しあるだけで、実はD歌群のはまとめて贈られたものである。そのことを示している歌群の先頭にある詞書と、似たような状況を示す二つの詞書を見ると、

- ①「服におはしけるに、内よりまどをなりける御かへりに、日ごろ思し集めたりけるを、御てならひのやうにてたてまつらせたまひける」（西本一八、本文は『私家集大成Ⅰ』の西本。以下も同じ、適宜漢字を当て、濁点・句読点を付した、歌番号は西本と書本のみ記す、①②③の傍線は筆者）
- ②「まゐり給ひて、御てならひに」（西本一〇五・書本三五）
- ③「故宮失せ給ひて、里に久しうおはしければ、などかくのみまゐり給はむとありける御かへりに、物の心ぼそくおぼえたまひて、書き集めたまへりけるを、とりあやまちたるやうにて、まゐらせ給へりける、御かへりどもさりげなくて御文の中にあり」（西本一二〇・書本五二）

徽子の方から先に贈ったわずかの歌は、それぞれの時の贈り方が示されている。①②は、天皇に見せるつもりがはつきりあったのではなくて、なんとなく思いを歌にして書きつけていたものとし、③は差し上げるはずではない詠草が

[資料三]『斎宮女御集』中の、徽子の村上天皇との贈答歌および関連する独詠歌（六十四首）

	F	E	D	C	B	A	歌群
	87 85 83 80 78 b	62 61 35 34 32 30 28 26 25 23 21 19 18	17 16 15 14 13 12 11 10 8 6 3	西本 書本 仙本 村本	歌番号		
17 15 13 10 8	111 110 68 · 74	63 61 59 58 · 56 54 53	· · 87 86 84 82 80	7 5 2 78			
· · · ·	53 52 17 26 24 23 22 21 · 18 16 15 14	13 10 9 8 7 6 ·	· · 3				
21 19 17 15 13	· · 68 · · 74 · 64 78 72 · 66 ·	· · 102 23 52 · 57	12 10 8 ·				
86 84 82 79 78 a ↓ は天皇歌? （連歌）	60 ↓ と重複 60	123 31 29 27 24 22 20	□ □	（書本） 85 ↓ 書仙本下句異	□ □	9 7 5	（贈答関係 ～備考～）

L	K	J	I	H	G
191	147 146 145	142 139 137 136 134	127 125 123 35	121	119 117 115 114 113 111 109 107 105 104 103 101 99 97 95 93 91 89
·	148 · 81	155 151 149 84 147	137 70 68 66	51 49 47 46 45 41 39 37 35 34 33 31 29 27 25 23 21 19	
·	92 11 5	102 99 93 91 88	79 19 17 20	· · 89 · · · · · · · · · · · ·	
·	104 103 ·	80 85 105 52 24	· 70 68 62	60 58 55 54 53 47 45 43 41 40 39 · 36 34 32 30 28 26	
190	? 144 ?	138 135	□ 122 120 118 □ 118 108 126 124 122 118 116	□ 110 108 108 106	102 100 98 96 94 92 90 88 102 100 98 96 94 92 90 88

記号（注）

西本以外
・・・
161 153 72 43
162
・・・
76 · 77 49
（書本）
152 71 42
↓
73 112

西本 || 西本願寺三十六
書本 || 曲陵部本
人集本
書仙家集本
矢印は「番号」は「番号」
子歌へは「番号」
歌群は天皇の手紙か伝言
贈歌番号
歌群の分け方は私案
子歌へは「番号」
歌は天皇の返歌番号
（書本）
（書本）
（書本）

何かに紛れ込んだようにでもしたのだろうか。しかしそれは「やうにて」だから、天皇に読んでもらいたい歌だったのである。なぜそのようなおかしな贈り方をしなければならなかつたのか。この①②③は、徽子が天皇に歌を差し上げたことが後宮でとり沙汰されたときの言い訛めいたものではなかつたか。天皇が歌を贈るときには殿上人に持たせ、徽子はその使いの者に返歌を託すはずである。ところが徽子の方から先に贈る場合は、徽子の側の使者が宮中に出入りすることになるから、これは目立つであろう。①のように、天皇からの文もあまり届けられなくなっているときに、頻繁に使者を送れば、それは後宮ひいては宮廷社会の噂の種になるであろう。この時代の男女の贈答歌は、男の方から贈って、それに女が返すのが一般的であったから、徽子の場合も時代の慣習に従つているともいえるが、①②③の詞書が付けられなければならなかつたことは看過できない。皇妃はことに、夫である天皇に歌を贈ることもままならなかつたのである。

徽子は女御として十八年半の間後宮の人であった。その徽子の皇妃としての立場や重んじられた、それにつけての徽子の心情は大きくは三つの時期に分けられると考えているが、天皇関係の徽子の歌のほとんどの詠歌時期が分からぬこともあり、また皇妃の時期の徽子という人間像には一貫するものも濃厚であると考えるので、以下徽子の皇妃時代を一括して検討する。

三、多妻の一人でしかないことを表現した歌

- ① 「 まう上らせたまへときこえさせたまふに、さもあらねば、こと人なむときかせたまひて
鶯の鳴く一声にきけりせば呼ぶ山びこやくやしからまし」(西本一六、歌番号は徽子の歌にのみ記す)
- ② 「 また女御、いはむかひなの夜や、目のさめつつ
里分かず飛びわたるらむ雁がねを雲居にきくはわが身なりけり (西本二三)
御かへし
玉づさをつけけるほどは遠けれどとふことたえぬ雁にやはあらぬ」
- ③ 「 御殿ゐし給へりける夜、いかなりけることかありけむ、御方を過ぎつつ、こと御方に渡らせたまひければ
かつみつつ影はなれゆく水の面にかく数ならぬ身をいかにせむ」(西本一四六)
- ④ 「 まう上らせ給へるに、上の御殿籠らせ給へるほどなれば、ただに下りさせ給ひて、またの日 (本文は書本による、
西本「御かへし、帝を恨みたてまつりて」)
隠れ沼に生ひたる葦の浮きねしてはてはつれなくみゆるころかな」(西本一四五・書本八一)
- ⑤ 「 もろともに御琴ひかせたまひて、その夜まかでたまひにければ
あかざりし琴こそ今も忘られねいつしかかへる声をきかばや
御かへし
思ひいづることは後こそ憂かりけれ帰らばかは (へ) る声やきこえむ」(西本一〇・書本七)

①は、天皇からの夜の宿直の召し出しが徽子にあったのに、それを受けなかつた、そこで他の皇妃の誰かが代わりに召されたという経緯が詞書で分かる。徽子は天皇のたつた一回の召し出しに応じていたら悔しい思いをするところだった、天皇は私を切に求めていたのではない、他の人でもよかつたのだ、天皇のその本心が見えてしまつたと詠んでいる。天皇からすれば、多くの皇妃を持つからには当然ともいえる行為であるが、徽子には当然ではなかつた。それは私は特別という意識からであったのか、あるいは個の尊厳を否定する多妻形態への反発まで意識されていたのか。

②では、「里分かず」多くの皇妃たちとの情事に狂奔しているらしい雲居の人天皇のことを思うと、喪に服して里に居る私としては嘆いてもどうしようもないのに、悶々と眠りもやらずにいると、すさまじい胸中を詠む。このあからさまで皮肉たっぷりな歌はD群のであるから、「てならひ」のように書き連ねて天皇の目にいれている。天皇は持てる皇妃たちと等し並みに関わるのが良いとされた時代、「里分かず飛びわたる」のはむしろ褒められていいことなのである。しかし徽子の非難と嗟嘆は、受け身である女の側の実感に違いない。

③は『拾遺集』にも採られていて、その詞書によれば「承香殿の前を渡らせたまひて」とあり、『村上御集』のもそれに近い。その詞書も参照してみると、天皇は徽子の居る承香殿の方に一瞥をくれ、その側を通って他の皇妃の殿舎の方へと行っている。清涼殿にもっとも近い承香殿が後宮での居處であった徽子は、天皇のこうした行動を知ることもしばしばあったのかもしれない。そのようなときの徽子の心中については五章で見る。

④は書本の詞書であるが、これによれば、徽子には夜の召し出しがあって、上の御局へ上がつたところ、天皇はすでに御帳台の中にあって、そこには他の皇妃の誰かが待っていたに違いない。西本詞書の「帝を恨みたてまつりて」が、徽子の感情を端的に表している。幾日、幾十日ぶりかの召し出しであったかもしれない。最高のおめかしをし、装束を整え、女房たちを従えて上の御局へ出向く。そして受けた屈辱。だがこの歌は翌日天皇へ届けられたものであるからか、天皇を詰問するのではなく、私はみじめに一人寝をして、やがては冷たくなっていくあなたであろうと詠む。

⑤は天皇と琴の合奏をして、その夜に下がる時、天皇から、早く帰つて来て、このような楽しいときをまた持とうとの大変優しい歌をもらう。それに対して徽子は、私が帰つて来たときには、別の召された皇妃の琴の音が聞こえているのではないかしら、そう思うと今日のこともかえつてつらく思い出されるかもしれないと返す。このような歌の切返しは、当時の女歌の常套的な詠み口ではあるが、皇妃たちの生活の現実でもあつただろう。たまにおとずれた幸せの一時は、かえつて後に疼く辛さを思わずにはおれなかつたのかもしれない。

このように徽子は歌や詞書で、一夫多妻の皇妃の一人でしかない自分のあるときの状況やその心情を詠み、天皇に

示した。天皇は徽子の妥協しない生の心情を詠んだうまい歌に心動かされているようでもあるが、これは徽子にとっては危ない賭けでもあったはずである。それでも徽子は詠まずにはおれなかつた。

四、愛を求め、涙にくれる歌

①「上より御ふみありける御かへりに

薄氷閉じたる冬の鶯はおとなふ春の風をこそ待て」(西本一七)

②「里におはします頃、帝を夢に見たてまつり給ひて

見し夢にうつつの憂さも忘られて思ひなぐさむほどのはかなさ」(西本一四七・書本一四八)

③「また女御、あはれのさまやと

ほのかにも風は告げじな花すすきむすぼれつつ露に濡るとは」(西本二六・書本五九)

御かへし

花すすきうち吹く風に靡きせば露に濡れつつ秋を経ましや」

④「また女御、かぎりなりける

秋の野の萩の下根に鳴く虫の忍びかねては色に出ぬべし」(西本二八・書本六一)

⑤「ものをこそいはでの山のほととぎす人知れぬ音を鳴きつつぞ経る」(西本八〇・書本一〇)

⑥「まかでたまひて五月までまゐり給はざりければ

里にのみ鳴きわたるかなほととぎす我が待つ時になどかつれなき」

御かへし

ほととぎす鳴きて世に経る声をだに聴かぬ人こそれなかりけれ」(西本九九・書本二九)

ときこえたりしに、内の御、聞かぬとありしは

かくばかり待乳山のほととぎす心知らでやよそに鳴くらむ

御かへし

訪ひがたき心を知れるほととぎす音羽山に鳴くにやあるらん」(西本一〇一・書本三一)

⑦「身の憂さにいとど生ひたる浮草の根ならば人に見せましものを」(西本三四)

⑧「流れ出る涙の川に沈みなば身の憂きことは思ひやみなむ」(西本一〇七・書本三七)

内の御

涙川そこにも深き心あらばみな渡らんと思ふなるべし」

①では天皇から便りを貰って素直に喜んでいるし、②は天皇を夢に見て、思いをかけてもらっていたからこそと心慰められている。しかしこのような天皇への愛情を素直に表現した歌はきわめて少ない。

③は、私が鬱々として涙にくれている哀れな様子を、風は伝えてくれないのかしらとのしおらしい歌であるが、あなたが私に靡くならそのように涙を流すことはないであろうにとの天皇の返歌をみると、徽子は参内をかたくなに拒んでいたのである。

④の、ずっとひそかに泣いていたが、耐えられなくなつて人に知られるほどに激しく泣いてしまいそうですという歌の下句は激しい。後宮の多妻の一人でしかない自分を痛感するようになった時期であろうか。

⑤では密かにもうずっと泣きながら過ごしているとなっている。天皇に胸中を訴えても仕方ないとの諦めもやがて強くなつていったであろう。

⑥は、それ以前に天皇からの帰参を促す便りがあったことがうかがえ、さらに私は待っているのになぜそのように冷たいのかと優しいか、徽子は、私が泣いている声を聴いてくれない人、私のつらさを解ってくれないあなたこそ冷たい人と返す。重ねて天皇は待っている私の心がわからないのかとの歌。だが徽子は帰参することができないのを、私はよく解っているので泣いているのだと返す。歌の上だけにしても、情愛をみせている天皇に、自己を貫いてくずおれなかつた徽子である。天皇という至尊に対しての畏れもない。弱々しく詠んでいるものもあるが、天皇と対等の位置での発想のもあるのは、やはり出自の高さと歌人としての自信があるからであろう。

⑦は、憂きことつらいことが次々に重なってくる。その私の心を浮草の根のように、取り出して見せることができたらいいのにと詠む。この歌は天皇へ届けたものかどうかはわからないが、浮草のようにもつれ、絡み層をなすほど の苦悩、その下には底無し沼のような無限の暗黒の心。その苦悶の塊を掘み出して天皇にじわりと見せたいものだと は、何ともすさまじい心象風景といわねばならない。

⑧は、苦しみの涙を滂沱と流して川となるほどであるが、その川に身を沈めたら、私のつらいこともなくなるだろ うとは、発想としては自殺願望である。この過激な歌も天皇に届けられた。さすがに天皇の返歌はきびしい。あなた に深い愛情があれば、誰だってあなたを愛するだろうにと、徽子の天皇への心の有り様の報いとして愛されないのだ という。たしかに天皇とのかなりの贈答歌からは、歌としては天皇は優しく招き、参内を待つ。だが徽子は拒み、反 発し言い返す。かなり激しく。それがほとんどの贈答の構図となると、それは拗ねてみせる、あるいは愛情表現の裏 返しと言ってしまえない、徽子の真情として受け止めざるをえないものを感じる。

五、反発や拒絶の歌

- ① 「 参り給はむとありけるほどの過ぎければ、内
なかなかにいつともしらぬ時よりも今やと待つはあかぬ心よ
御かへし
忘草生ふとしきけば住の江の松もかひなく思ほゆるかな」(西本九五・書本二五)
- ② 「 七日、内の御
こよひさへよそにやきかむわがための天の川原は渡る瀬やなき
御かへし
天の川ふみみることのはるけさに渡らぬ瀬ともなるにやあるらん」(西本八五・書本一五)
- ③ 「 まかでて久しく参らぬに
天の原そとも見えぬ大空におぼつかなしと嘆きつるかな
御かへし
嘆くらむ心を空に見てしがな立つ秋霧に身をやなさまし」(西本一四・書本八六)
- ④ 「 参り給へりけるに、渡りたまひていかなることかありけむ、帰りたまひて
水の上にはかなきことも思ほえず深き心しそにとまれば
御かへり
忘れ川流れて浅き水無瀬川なれる心やそこに見ゆらん」(西本九七・書本二七)
- ⑤ 「 院の上の御服になり給ひて、内の御
墨染めの身にむつましくなりしよりおぼつかなさはわびしかりけり
御かへし
墨染めの色だになくはほのかにもおぼつかなさを知らでやあらまし」(西本一〇三・書本三三)
- ⑥ 「 久しうとあるだにたびたびになりにけるほどに
うら三津の浜に生ふてふ葦しげみひまなくものを思ふころかな」(西本一二五・書本七〇)
内の御
恨むべきこともなにはの浦に生ふあしざまにのみ何思ふらん」
- ⑦ 「かくばかり思はぬ山に白雲のかかりそめけむことぞくやしき」(西本一〇九・書本三九)
- ⑧ 「わびぬれば身を浮雲になしつも思はぬ山にかかるわざせじ」(西本一三七・書本一四九)
- ⑨ 「谷川の瀬ぜの玉藻をかきつめてたが水屑とかならんとすらむ」(西本三〇・書本六三)

①は徽子が宮中に戻るといっていた日が過ぎても参内しないので、天皇が待ち焦がれているよとの優しい歌を遣わ したのに対して徽子は、あなたには私への忘草がはえている、だから待つといわれても甲斐ないことと、にべもなく 返す。これも女歌の切返しの型でもあるが、続く②～⑥も同様の反応を表現しているのをみると、それは技巧の次元

では処理できないようである。

②は、七夕の今日でさえも私たちは逢えないのだろうかという天皇の歌に、お便りをいただくこともめったになくなつたのだから、ついにはあなたは私の所へ渡つて来られることもなくなるのでしょうかと、逢えないのはあなたの所為という。

③は、長く里に帰っている徽子に、雲の上の宮中にあなたがいなくて、心もとなくて嘆いているとの歌を贈つたのに、徽子は、私もため息ばかりついているので、その霧になって大空に上つて、雲の上人あなたの嘆きが何によるのかを見てみようかしらというのである。機知的で幻想的発想だが、その芯には遊び心ではない厳しさがあるに違いない。

④は、天皇が徽子の所を訪れた後、清涼殿へ帰つてから、私の心はあなたの所に留まつているとのやはり優しい歌が届けられたのへ、天皇は私を忘れ、愛情も浅くなつていらっしゃる、その心が、水がなくなつた川底に見えていますと、なんとも索漠とした光景として詠まれている。天皇の言い訳とも思いやりともいえる情ある趣の歌に対する、そのお心は見透かしていますとの切返しは、技巧をうまく使いながらも意思を充分表現している。

⑤は、朱雀院への喪中になって以来、皇妃の宿直もしないので、あなたにずっと逢えなくて淋しいと天皇は詠む。それには徽子は、そのような他の皇妃を召すことができないときにしか私を思い出すことはないでしょうと返す。これは天暦六年のことであるので、入内から四年ほど、父重明親王も式部卿として生存中であり、徽子の後宮生活ではもつとも良き時代であったはずだが、それでも十人ほどの皇妃の一人でしかなかつたことはたしかである。『村上御集』によれば、天皇は「逢坂もはてはゆききの関もみず訪ねてとひ来きなばかへさじ」(八三)の歌を皇妃みなに贈つて、この歌が折句沓冠歌であることを誰が見抜くかを試したとある。この⑤の天皇の歌も皇妃の幾人にも配られたのかもしれない。天皇の優しい歌にも、つねに心許せない、疑心暗鬼の緊張の日々は入内当初からあつただろう。

⑥は、宮中に帰参するようにと天皇からたびたび促されているのは、思いやりと考えてもよいのだろうが、それに対し、あなたへの恨みがびっしりと生えているので、ずっと鬱屈していますと返す。天皇は、恨むことは何もないはずなのに、私をどうして悪し様にばかりいうのかと、これは弱々しい言い訳とも、居直った言い方ともいえる返しをしている。天皇の歌からむしろ、徽子が「悪し様」に思う出来事があつたことがうかがえる。それを懸詞とはいえ、「恨み」という言葉を絡めて糾弾するこの歌は激しい。

⑦⑧では、「思はぬ山」は天皇で、「雲」は徽子。⑦の方は、これほどに私のことを思ってくださらない天皇に、どうして関わりを持ちはじめたのか、それが悔しいとする。⑨は、つらく情けなく定めない身の上だけど、それでも天皇にすべてを託して、寄りかかるようなことはするまいと、皇妃となつたことを否定し、天皇との隔絶を決意している。天皇を「山」として詠むのは、崇め奉る意識からではなく、後宮の統治者に対しての、どうしようもない無力感ではなかつたか。当時まだあまり使用されていない「浮雲」は「憂」も懸けて、徽子は漂い流れて行く雲に自分を象徴させる。この二首は天皇に届けたかどうかはわからないが、歌に自信があつたらしい徽子だからこそ、大胆に心情を表明もしたのだと思われる。ところが⑨は「手習ひ」のよろにして届けたD群の末尾の歌だが、そのようにして書き集めた私の歌も、あなたにとっては水中のごみでしかないと、皮肉をこめた卑下をしている。天皇からの召し出しがまれであつたと思われる徽子にとっては、歌が天皇との懸橋であり、歌には全存在をかけていたのではないかろうか。女御という名誉ある地位を授けられた者は、その立場から逃げることはできないので、身を雲にして、漂っているしかない。しかし夫である天皇に、わが身と心を預けることを拒否し、心ゆるすまいと決意したならば、はたしてどのような生き方があるのだろうか。

六、自虐と自尊心の歌

①「知らなく忘るるものはおぼつかな藻に住む虫の名にこそありけれ」(西本二一・書本五六)

御かへし

忘るらん藻に住む虫の名を問はばかひもありとぞ海人は告げまし」

②「こち風に靡きはてなぞ海人舟は身を恨みつつこがれてぞ経る」(西本一三四・書本一四七)

③「さかさまにいふとも誰かつらからむかへすがへすも身をぞ恨むる」(西本三二・書本七四)

④「また、子の日の松にさしてありし
子の日にはいかにせよとかうちはへて待つをも知らぬ心なるらん
御かへし

春よりも浅き緑の色見ればひとしほ増すはなき名なりけり」(西本九三・書本二三)

⑤「身の憂きを思ひ入り江に住む鳥は名ををしこそ音をもなきけれ」(西本一一・書本四一)

三章の③歌の下句に「かく数ならぬ身をいかにせむ」と詠んでいる。天皇にとって、私はものの数にも入らない身、私という存在の価値は認めてもらえなかつたと表現しているが、徽子は出自・経歴・教養のすべてにおいて、他に引けを取らないだけに、徽子は自惚れもあつただろうし、それらが自尊心の拠り所でもあつただろう。いわば最高の女としての条件を備えていた。にも拘わらずないがしろにされてゆく。「数ならぬ身」とは、天皇への痛烈な逆説でもあつただろうが、また誇りと自信の基盤が無力であることを痛感した徽子の、自虐的認識でもあつただろう。

①は、「藻に住む虫の名」は「われから」というのであるが、『古今和歌集』の歌を踏まえて、天皇の寵愛を受けられないのもすべて私自身の所為なのだと、己を責める。しかも知らなかつた、忘れていたとのくどい言い回しには、自分がそのことに得心して、天皇に縋らずに、毅然と生きようとする姿勢であるだろう。その歌に天皇は、その割殻の縁語の貝を懸詞として、私に心を寄せてきたら、それだけの甲斐はあるのにと詠んでいるように、たしかに徽子のかたくなな天皇拒否の姿勢がますます天皇を遠ざけていく。

②でも、天皇を恋焦がれているが、招きに靡くことはするまいと自戒する。海上に漂う海人舟も徽子の心象風景であろう。これほどに自己をさらけ出している歌は独詠であろうか。徽子はただひたすらわが宿世の拙さを恨んで生きるのだとの思いを強めていくのは③も同様である。なぜ徽子は皇妃たち、世の女たちがしたように、天皇にすり寄つていかなかつたのか。それどころか傾いていきそうな心をきびしく制御する。

④⑤では「名」が意識されている。④は天皇の愛が薄いので、ますますありもしない噂が広がっている、とはどのようなことであったのか。⑤では、宿命のつらさに思い沈んでは、汚されていく名が惜しくて泣いているとうたう。

七、まとめ

徽子は身を焦がすように天皇の愛情を求めながらも、天皇の招きを受けず、帰参を拒絶し、天皇に自分を委ねることを拒んだのはなぜか。そのような態度や仕打ちが、ますます天皇を遠ざけていくことも分かつてゐながらも、頑なに自己の姿勢を変えない基盤はどこにあったのか。

それはおそらく、自尊心と自信をしっかりと抱くことができた女であったからではなかろうか。皇妃の中では最高の家柄、尊崇される父、斎宮としての経歴、それらは徽子の皇妃としての自信をゆるぎないものとしていたであろうし、ゆえに自尊心も強かつたであろう。徽子にとって寵愛は尊厳の証だったのである。しかし一夫多妻の天皇に徽子はどのような愛の形を望んだのか。愛の独占など考えうべくもない後宮である。だが天皇の他の皇妃との関わりを許せない。それは愛の度合いなどではなかつたのであろう。多妻の一人でしかない徽子は、結局天皇を拒否し、拒否することでますます遠ざかる天皇を恨み、己を責める。なぜそれほどに傷つきながらも、頑なに生きなくてはならなかつたのか。徽子が必死で守ろうとしたのは、自己のプライドであり、父に負う「名」の尊厳ではなかつたろうか。さらに歌人としての自信は、その自己を臆する事なく表現し、後に第三者の目にも触れる家集とする準備もしていたと考えている。

[参考] 次の西丸稿を元にまとめたものである。

1. 「斎宮女御集伝本系統に関する考察」 語文研究 1971年10月
2. 「斎宮女御集の成立年代について」 福岡女子短大紀要 1975年12月
3. 「斎宮女御徽子の周辺」 福岡女子短大紀要 1976年3月
4. 「斎宮女御徽子の周辺二」 福岡女子短大紀要 1976年12月
5. 「源氏物語六条院の史的背景」 中古文学 1978年12月

6. 「斎宮女御集への徽子本人の関わりかた」 笠間書院（共） 1995年10月
7. 「斎宮女御徽子の村上天皇への心情」 福岡女子短大記要 1995年12月
8. 「斎宮女御徽子の、義母登子への心情」 福岡国際大学紀要 2001年2月